

5 畜 産

項 目	作 業 内 容									
<p>(1) 飼料用イネ、飼料用米の収穫・調製</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○飼料用イネ、飼料用米の収穫・調製 ○秋播き飼料作物の播種 ○稲わらの収集 <p>ア 飼料用イネ（稲発酵粗飼料（WCS）用イネ）</p> <p>WCS 用イネは、栄養価や収量を考慮すると糊熟期から黄熟期が収穫適期とされ、従来品種の黄熟期の目安には、出穂後の日数（表1）のほかに、穎の半数が黄化、穀粒は葉緑素が消失して黄色となり爪で容易に破砕できる状態、胚乳のロウ状等がある。</p> <p>黄熟期の水分はサイレージ調製に適した65%以下のものが多いが、降雨直後の収穫は水分が高くサイレージの発酵品質が低下するので避ける。また、牛の嗜好性や消化率が高い極短穂茎葉型品種（表2）は、刈取りステージが進んでいても消化率が低下しないため、早刈りをせずに糖含量が十分に高まる出穂後40～70日以降の収穫が望ましい。</p> <p>表1 WCS 用イネの黄熟期の目安（出穂後日数）</p> <table border="1" data-bbox="477 1120 1372 1223"> <thead> <tr> <th></th> <th>早生品種</th> <th>中生・晩生品種</th> <th>モミロマン</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>出穂後日数</td> <td>25～30日</td> <td>30～40日</td> <td>40～50日</td> </tr> </tbody> </table> <p>表2 極短穂茎葉型品種</p> <table border="1" data-bbox="477 1272 1372 1352"> <tr> <td>たちあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきはやか（早生）、つきあやか（中生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）</td> </tr> </table> <p>収穫において、刈落とし後にはほ場で予乾作業を行う場合は、2～4日間程度の晴天を見込み、土砂の混入や粃の脱粒による品質、栄養価の低下を防ぐため過度の反転は控える。イネは茎が堅く中空構造で嫌气的条件を作るのが難しく、付着する乳酸菌も少ないため、サイレージ調製では乳酸菌製剤等の添加が望ましい。ロールベールサイレージにする場合は、フィルムの巻き数は6層巻を基本とし、収穫翌年の夏を超えて利用する場合は8層巻にする。</p> <p>また、長期間の保管では、防鳥ネットやテグス等を利用した鳥害対策（写真1）を講じる。ネット等はロールベールに密着させないように注意すると</p> <div data-bbox="960 1630 1380 1937" data-label="Image"> </div> <p>写真1 ネットによる鳥害対策</p>		早生品種	中生・晩生品種	モミロマン	出穂後日数	25～30日	30～40日	40～50日	たちあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきはやか（早生）、つきあやか（中生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）
	早生品種	中生・晩生品種	モミロマン							
出穂後日数	25～30日	30～40日	40～50日							
たちあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきはやか（早生）、つきあやか（中生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）										

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 秋播き飼料作物の播種</p> <p>(3) 稲わらの収集</p>	<p>もに、保管場所周辺の環境整備（草刈り等）を定期的の実施する。獣害が心配な場合は電気牧柵の設置も検討する。</p> <p>イ 飼料用米</p> <p>多収品種の場合は、コンバインへの負荷を低減するため、低速走行や刈取り条数を減らす等の対策が必要である。</p> <p>乾燥経費を下げるため、倒伏や脱粒、気象条件に問題がない範囲で、立毛状態での乾燥（立毛乾燥：写真2）も有効である。立毛乾燥による籾水分18%以下の目安（地域や気象条件により増減）は、早生・中生品種は出穂後50日、晩生・極晩生品種は60日とされる。最終的には、貯蔵時のカビ・腐敗の防止のため、乾燥機で15%以下に仕上げるのが重要である。</p>  <p>写真2 立毛乾燥</p> <p>本県のイタリアンライグラスの播種適期は、10月上旬～11月上旬で、播種量は10a当り3～4kgが基準である。不耕起栽培や播種時期が遅れた場合は、4～5kgとやや多めに播種することが望ましい。播種後は、種子と土壌の密着度合を高め、発芽を早めるため2～3cm程度の覆土・鎮圧を行う。鎮圧は発芽を早く揃えるだけでなく、表層の凸凹をなくし、収穫時の“土の混入”を防ぐとともに、冬期の土壌乾燥を軽減する効果もある。</p> <p>稲わらの収集は、天候やほ場条件によるが、できるだけ晴天が3日以上続く日に行うことが望ましい。コンバインからバラ落としされた稲わらをロールベアラで収集する場合は、テッド・レーキ等で反転し十分に予乾してから行う。水分15%程度までほ場乾燥できれば、そのままの貯蔵が可能である。</p>  <p>写真3 ロールベアラによる稲わらの収集</p> <p>しかし、やむを得ず乾燥が十分に行えない状態で高密度にロールベアラに梱包する場合には、発熱やカビの発生等の品質劣化が生じるので、ラップフィルムで密封する必要がある。</p>

(畜産研究センター)